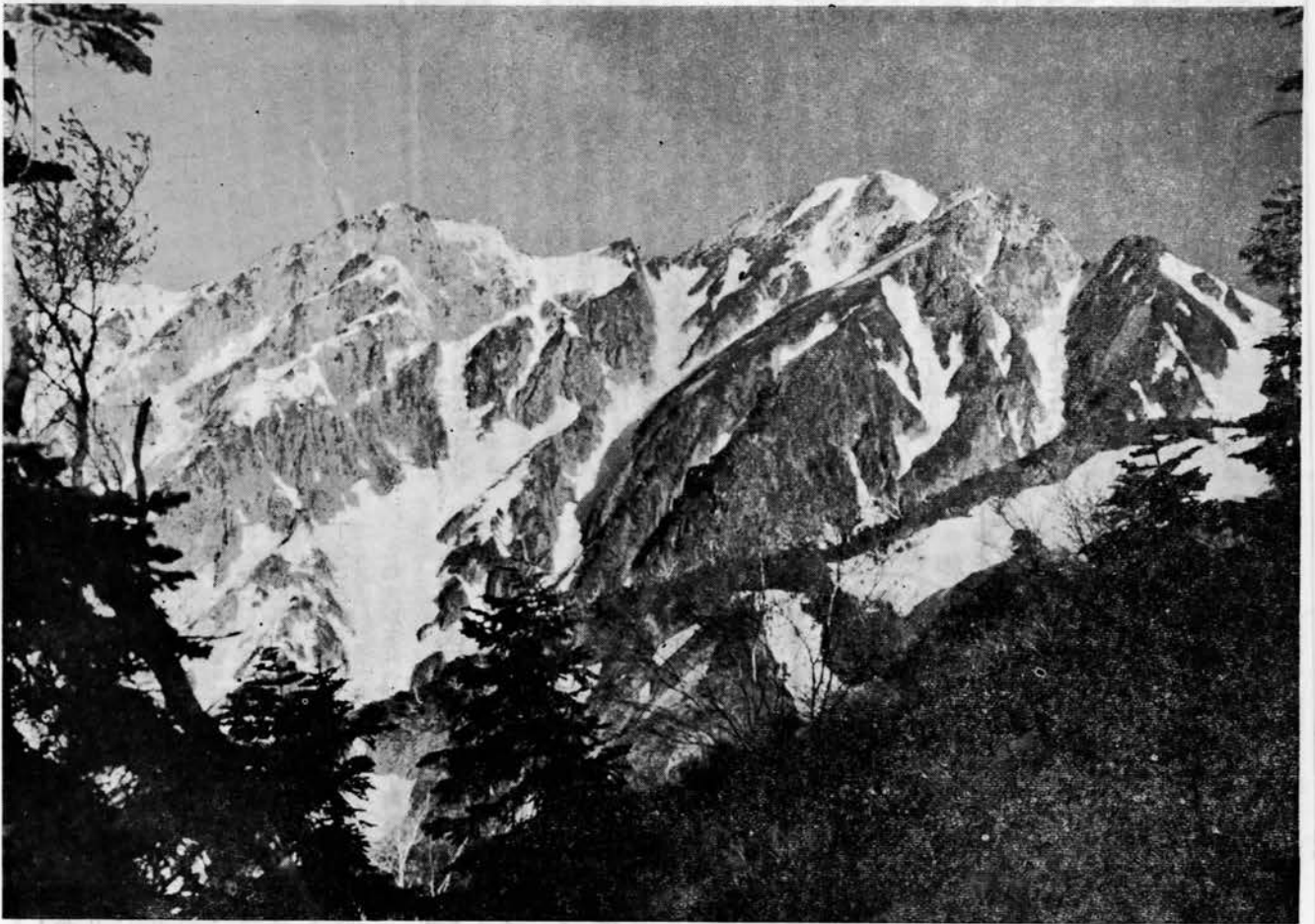


# 山と博物館

第13巻 第5号 1968年5月25日 大町山岳博物館



## 立山開発に思う

針の木岳の開発者、市内八日町にあった旅館「対山館」の経営者、針ノ木、大沢小屋の小屋主百瀬慎太郎さんは、針ノ木を越え平一刈安一五色一ザラ峠一浄土山一の一の越一立山このコースが雄峯立山へは信州から一番登りやすく、展望もきれいだと推奨していた。国鉄大糸南線の前身、信濃鉄道会社の山口勝さん、岳人でもあり山岳写真家の大町小学校の教師手塚順一郎さん達は、このコースを踏破して、立山連峯の大自然を満喫したものだ。

室堂、弥陀ヶ原、美女平、立山一帯のPRは百瀬さん達の宣伝ばかりでもないが当時大町から歩いて大沢小屋に一泊、針ノ木峠を越える立山行きが非常に多かった。

国鉄やバスの発達が遅れていた関係もあってたいがい登山者は大町に一泊、勿論対山館利用者のみであった、従って登山案内人組合の事務所も同館に設置、登山者の便宜を計るなど大賑わいだ。その後白馬岳が紹介されてから、立山行きは多少下火になった。

関西電力黒部川第四発電所が出来上り、ダム周辺が観光客に解放されてから、いままで歩いたコースが僅かな時間と軽装で見物できることになったので、また人気も盛り返してき、四十二年度は見学者が三〇万人を越へ本年はまだ増加しそうだという。

立山の自然環境は前記の通りであるが、四五年には立山黒部貫光会社の室堂一新丸山間が貫通する。工費は四八億九千八百三十九万円、両県民の願う国際観光ルートが実現する従来の登山者に加え一般観光客、スキー客を加えれば年間百万人が予想される。地元の受け入れ対策こそ重大問題だ。

# 唐沢岳春山合宿

長 沢 修 介

昨年の夏から秋にかけ懸案であつた唐沢岳幕岩への登攀を開始したが想像していた以上の困難にぶつかり昨年はずいぶん下部のルート工作にとどまらしてしまつた。

以後冬の状況調査及び周辺の沢の状況等に目標をおいて、毎月一回ずつの入山を決めていたが積雪初期の十二月月中旬に一回と三月中旬に一回の偵察を行なつたのみで今年の春を迎えるに至つてしまつた。

年度頭初 今年の五月合宿について大いに議論はあつたが、我会の発足の頃より開発につとめてきた唐沢岳、特に昔とは大きく変貌してしまつた、唐沢岳の西面、カラ沢の各沢及び尾根についてこれ等の開発と合せて新しい人達の雪上技術の習得という意味も含めて行なうという決定をみた。

しかし、一昨年の三月 餓鬼・唐沢集中、昨年の幕岩と毎年唐沢には入つていゝるものの、残雪期のカラ沢については、もうずつと以前頭初の開発の頃に入つた陰うつな感じしか残つておらずあの谷の何処がどうなつてゐるのか一抹の不安を打ち消すことはできなかった。

四月下旬 昨年九月に幕岩上半部までルートを通して東京の山岳会、「グループ・D・コルデ」から昨年十月に完全に完登したとの手紙が届き、今年の春の合宿には幕岩周辺に二十八日から入山するとの報が入つた。

我々も四月二十八日より入山の予定であつたのが、参加人員及び天候などを考慮、一部計画に変更を加え五月一日の入山となつた。

今回の入山は第一隊が五月一日入山、第二隊が五月三日入山、新しい人達も含めて総勢十三人の合宿となり、B、Cを三の沢橋よりカラ沢に少し測つた所において五月五日午前

中迄行なつた。途中五月四日は朝、雨が降り昼頃は晴れたが午後、雷鳴を共々アツレが降るといふ変わった天候のため、この日は休養の日であつた。以下は今回の合宿で入つた各尾根及び沢の状態であるが、今年例年になく残雪が多かつたことは各沢及びルンゼの登攀には大きな助けとなつた。

○カラ沢(入口よりB沢合流点鷺滝まで)カラ沢入口は昨年地質調査を行なつたため各所にそのあとを見る。堰堤を越える辺りまでは残雪もなく夏と同じであるが右岸に近年で来た大きな崩落の辺りは、大きなデブリが沢を埋めており、その上のナメ状の流はまだすつかりデブリの下でこの辺り厳冬の恐ろしさを知らされる。このナメ状の流の巻道で無雪期は右岸の尾根に取りつづくに苦勞させられるのだが、今回はデブリの上を歩いて簡単に右岸のまき道に取り付けた。これより金時の滝までは残雪もほとんどなく、夏と同じであつた。

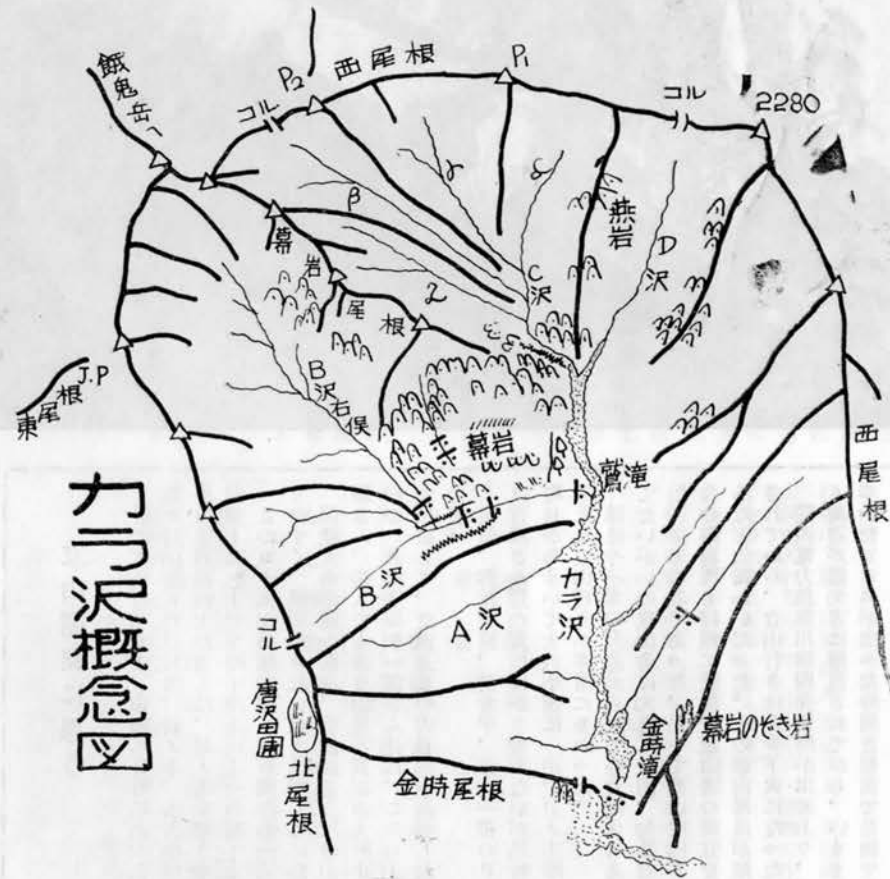
金時の滝の高巻きのルートは、雨後及び融雪期には落石に充分の注意をしなければならぬ。我々も第一回目の通過が丁度午後になつたため、上部からの落石に大変悩まされ、一時間以上も余分な時間を費してしまつた。

上部のブッシュには昨年取り付けた針金のフィックスがあるが、登下降にはいつもいやな所だ、金時の滝を越して間もなく沢はすつかり雪の中でB沢出合鷺滝までは雪の上を行くことができた。途中、両側より各所に大きなデブリが沢をうめつてゐる。B、C地点より鷺滝迄は登り約一時間半、下り約三十分であつた。

○幕岩のぞき岩より北尾根

この尾根はカラ沢のナメ流を高巻きして再びカラ沢に下りた所から対岸(左岸)へ取り付き、途中一ヶ所所急な岩を木によじ登つて、シヤクナゲのブッシュをぬけると大岩が現れる、この岩から幕岩のほとんどの全容が望めるのでこの岩を「幕岩のぞき岩」と称した。沢からこの岩まで約十五分である。ここは金時の滝の真上にあたるのでこの岩より尾根を少し登つてコル状の所から金時の滝の上へも下ることが出来る。厳冬期などの積雪状態の

悪い時はこのルートの方が前記のルートよりも金時の滝を越すには良いかも知れない。この岩の附近より尾根を切り開いてあり(恐らく測量の道と思われ)約一時間半で西尾根へ合する。この地点は西尾根の二、二八〇のピークより三つ下のピークである。総体にやせ尾根であつて、森林帯の中を歩くため視界は良くないが所々から北尾根及び幕岩を良く眺められる。幕岩の全容をつかむためには幕岩のぞき岩まではぜひ初めに登つてみたい



カラ沢概念図

のである。下降はこの尾根のすぐ上流にあるルンゼを下った。途中一ヶ所雪が切れて滝があったが、上部は急でよいルートではない。

○ D 沢  
カラ沢が昔のカラ沢よりもずっと開けた明るい感じになったと同じにD沢も昔に比べて広く明るい感じになったのは残雪が沢山あるためばかりではなく、C沢の分岐点、及び燕岩の附近もずっと広くなった。

B沢出合鷲滝のより右へ分れて約三十分でC沢との分岐点に立つ、これより少しの間急なせまい沢を登るとD沢の開けた所に立ち、左に燕岩、C沢の険悪な入口がゴルジュ状に、又幕岩右稜、が壮絶な姿でそびえている。

一方右側は二、二八〇坪よりの支尾根が岩壁となっており、振り返ると幕岩がすっぽりと切れ落ち、B沢が一直線に尾根へとつきあげていてその向うに真白な不動、蓮華、針の木岳が見える。この附近は沢が広いので良いが、上半部は急で絶えず両側から落石があり非常に神経をすりへらす、特に午後の通過には絶えず両側に注意していきないと落石を喰うことになる。鷲滝より約二時半で我々はD沢コルに到着した。これより唐沢の頂上まで

幕岩のどき岩よりみた幕岩全景



は、P2まで森林の中を深雪に悩まれ約二時間、P2より頂上までは急な雪稜を一時半で着いた。頂上はすっきり雪が消え春の姿であったが、北の後立山連峯、剣、立山、正面の裏銀座、南の槍、穂高連峯等見わたす限りの峯々はまた真白の冬の姿であった。下降はD沢のコルまで一時間コルから鷲滝までは三十分であった。

○ C 沢

今回のこの沢を説明することも一つの大きな目的であったが雪の状態等に不安があり入山するまで決定し得なかった、しかし初日の偵察等で午前中の行動ならある程度行なえる」と結論を下し、二日にγ(P1寄り)、三日にβ、及びγ(P2寄り)と三隊をいづれも朝五時出発で行なった。

C沢はβが本流ともいふべきもので端を幕岩尾根西尾根分岐点、及びP2コル附近から発し、途中で西尾根より入るγ及び燕岩の上より下るγを交え幕岩稜と燕岩末端の壁で構成する深いゴルジュの間を通過してD沢と合流している。

我々も今迄γが最上部迄入っていると気が今回の山行でC沢上部の状況が無積期と異って良く解明できたことは大きな成果であった。

B 沢のルートは

図示したが出合より約6時間を要しており、雪渓は急で、一部青氷が残っている所もあり滝も各所に出ている。γはβと分れてさらに溯り、γとの合流点でγの落口の流の青氷を右に見て、左に折れ、右、左、どちらのルンゼを登っ

ても一部青氷をまじえ、後から登って来る人の頭が自分の股の間から見える程急であった左右どちらも、C沢入口より五〜六時間を要して西尾根へ飛び出す。

無雪期のC沢はそれを登っても滝、滝の連続で、時間もこの倍は必要であろう。

○幕岩及び幕岩尾根

幕岩については昨年の「山と博」十一月号に書いたが主として正面壁の方でその左に左岩壁がありこれと間に中央ルンゼがあり昨冬の偵察ではこれが上部から青氷となって続いており下部は壁となって消えている。この中央ルンゼの下部辺りから取り付き、中央ルンゼ右を通り、パットレス状を登って、中央をぬけるルートは昨年十月グループ・ト・コルデの人達が完登した。このルートは七月にこの壁で墜落死した故畠山氏の名をとって「畠山ルート」と称することにした。

幕岩尾根は末端に幕岩という大きな壁をもち三つの顕著なピークを持って西尾根の頂上に近い所へつき上げており、下部は大木もあるが上部は岩とブッシュの急な大きい尾根である。

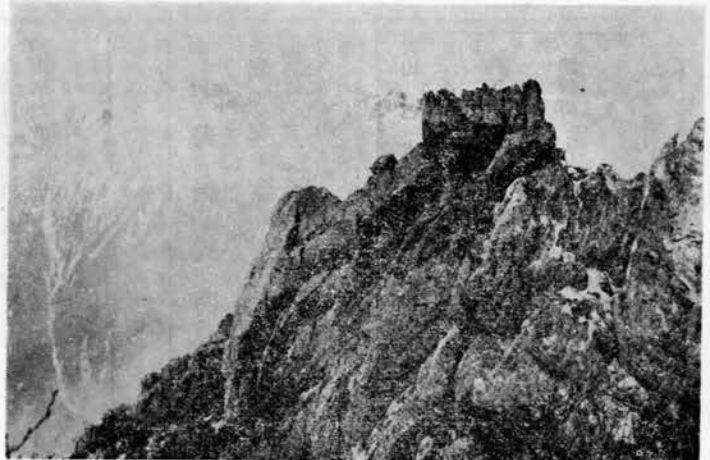
○ B 沢 右 俣

B沢は鷲滝より一直線に北尾根へつき上げているが、その中間部のゴルジュの所に、幕岩側より大きな五段の菱形の滝となってB沢に落ち込んでいるのがB沢右俣である。

この滝は九月の渇水期にも涸れず、本沢よりも大きい。この沢の上部は、幕岩尾根と北尾根に挟まれた大きな部分があり、最上部はJ・P、及び北尾根頂上へつき上げている。

このJ・P・北尾根頂上間に北尾根側から見ると、顕著なニードルを持ったもの、双子岩をもったもの、ワニが口をあいた形をしたもの等の三本の細い急なリッチがつきあげており穂高の滝谷を思わせる眺めである。これ等のリッチは下半部の状態が不明であるが、登る対称としては大いに興味があるリッチである。

西尾根ピークより見たニードル尾根



いずれにしろB沢右俣上部の細部は不明であるが、これ等は次の課題にしたい。  
この他今回は金時の滝より、金時尾根、唐沢田圃、A沢からAB稜、B沢等を行なったがこの方は前にも積雪期、残雪期、無雪期に何回もトレースがあるので今回は省略する。  
(大町山の会)

お願い 「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)

# 北アルプス北部の山今昔

(一)

……後立山連峯を中心として……

## 長 沢 武

後立山周辺は、こゝ十年間に驚く程開発が進められ、観光的に大きく脚光をあびて来ております。山麓には沢山スキー場が誕生し八方尾根にはケーブルが架設され、黒部ダムの完成と同時に大町ルートが一般に開放されてから、後立山を訪れる観光客は年間百五〇万人を超えようとしております。

来年は待望の黒部ダムの満水で湖には百五〇人乗りの遊覧船が浮び、さらに四五年には立山ルートの開通で、いながらにして後立山、黒部溪谷、立山連峯を横断することができ、大観光ルートが誕生する予定です。

ところが、この日本の中央部に残された秘境は、明治四〇年頃までは、一般にはさらに縁のない山で、**ノ嶽**として、千古の謎のベールに包まれたまま、現在に到るもまだほとんどその歴史的な考察は進んでおりません。

しかし、富山側については、加賀百万石の城主前田侯によって、早くも一、六四八年(慶安元年)以来明治に到るまでの間、**ノ黒部**奥山廻り役々をして国境線の三俣蓮華、野口五郎から針ノ木峠、さらには鹿島槍から白馬三山と黒部溪谷一帯を踏査されており、又信川と越中を結ぶ山峯の峠、針ノ木峠は古くから潜道として利用されていた記録があり、これらについて、中島正文氏の「黒部奥山と奥山廻り役」(昭和十一、十三年)「針ノ木峠考」(昭、三四)「信越国境観念の成立試論」(昭

、三五)「立山黒部文献目録」(昭、三三)を初めとする一連の研究などで、大分進んでいるが、こと信州側に関しては、前記中島氏の「白馬岳史雑考」(昭、二三、二七)の貴重な研究を除いては、これといつてまともな発表がなく、誠に残念でなりません。

名前こそ後立山ですが、最近の観光面では信州側こそ北アルプス北部の表支関であり、これらの山の歴史についてもっと調べておく必要を痛感するものです。

そこで、浅学を恥ず敢て手元にある僅かな資料を基に、後立山周辺の信州側の山を中心として古の姿を尋ねてみ、大方諸賢の奮起と資料の発掘などについて御教示をおねがいする次第です。

### 一、山名考

(1) 古山名について

今でこそ正確で立派な地図があり、山の名前も統一されしっかり決っていて、どの地図を見ても、また何所へ行っても同じ呼び方をしますが、これには陸地測量部の五万分の一

の地図がはたした役割は大きなものがあり、すこの五万分の一の地図の北アルプス地方のものが、最初に発行されたのは、大正二年ですが、この地図作製のための实地踏査や測量は古く、明治十七年以内務省地理局と陸軍参謀本部とでそれを行なわれていたものが参謀本部で統一して行なうことになり、さらに明治二十一年には陸地測量部が発足してい

よく本格的活動が行なわれるようになったもので山頂に三角点が標点されたのは、白馬岳が明治二六年で測量官は館澤彦。また鹿島槍は明治三五年で、測量官は古田盛作氏①でしたが、当時の苦勞が思いやられます。

この測量の頃はようやく日本に近代の登山が始まった頃で、後立山連峯においても、山の名前は未だ固定していません。明治三五、四〇年頃にこゝを初縦走した人達は、分まよわされ、どの山の隣にどの山があるのか、地図で研究して来ても、現地で当たると全く違うという例が多かったようです。

ちなみに、明治四二年七月祖父岳に登った辻本満丸氏は、その時のようすを②地質調査所二〇万分之一地形図には白馬の鏡の南に、不帰岳、大黒岳、鹿島槍、赤鬼ヶ岳、餓鬼岳、祖父岳、鹿島大岳、後立山という順序に山名を記してある。然るに自分が今大町で買った北安曇郡明細地図(明治四二年調整)には、唐松谷岳、大黒岳、鹿島槍ヶ岳、屏風岳、鹿島入岳、祖父岳、赤沢岳という順に記してある。又予察四〇万分之一地形図の此の区域に記されてある山は、上大ヶ岳、東叡山、乗鞍岳、布引岳、祖母岳、屏風岳という順序で前の二つとは餘程相違している。斯様に名称の確定されていないだけでも此等の山岳が如何に世間から閑却されているかが分るであろう。

三枝氏は昨年夏、白馬から五竜岳に至られ今年大黒岳から尾根づたいに鹿島槍ヶ岳の絶頂を極められたが、不帰、八方、大黒、五竜でつぎが鹿島槍だといふ。自分の管見からすれば、赤鬼岳、餓鬼岳、鹿島大岳などという山は祖父岳、鹿島槍に対する越中方面の異称ではないかと思う。と記しているのを見る

と当時のようすがうかがえて面白い。

【註】  
① 寺田寅彦「地図をながめて」  
② 「祖父岳の二日」山岳4年第3号 (明治42年)

(山博調査員)

## 博物館だより

小鳥の声を聞き

山菜を採集する会

山博・市教委・観光課・市公民館共催の「小鳥の声を聞き山菜を採集する会」は来る6月2日(日曜日)に行なわれる。

コースは昨年と変わり青木湖・佐野坂方面で大町駅前を午前4時に貸切バスで出発する持物は、朝・昼食、雨具、筆記用具、双眼鏡、山菜を入れるもので、小鳥の声・植物の小冊子を参加者に配布いたします。

会費は二〇〇円、子供一五〇円  
申込は前記の四カ所雨天の場合は中止。

### 表紙説明

五 竜 岳  
撮影 内田博文

山と博物館 第13巻第5号

一九六八年 五月二十五日発行

発行所 長野県大町市TDL大町②〇二一  
大町山岳博物館

印刷所 大町市下仲町  
大糸タイムス印刷部

定価 年額 三〇〇円 (送料共)